緑爽会会報　No. 147

2016年12月22日発行
日本山岳会　緑爽会
発行人　富澤克禮

デザイン・制作　関塚貞亨

～～《報告》～～～

懇親会場である「めしや大磯港」に着く頃は真っ暗となり、漁場の番屋を思わせる店は新鮮なイシダイ、サワラの炙り、赤貝刺し他などの肴に舌鼓を打ち、秋の一日の佳き宴を満喫して打ち上げとなった。お世話になった川俣会員に拙作の一首を謹呈しました。

海山の光を受けて碑は建てり淡多羅山の翁(おう)の清しき

（淡多羅山は千畳敷、湘南平の古名と聞く）

山行参加者（12名）左から: 夏原寿一、川俣俊一、松本恒廣、藤下美穂子、渡邊貞信、砂田定夫、富澤克禮、瀬戸英隆、石塚嘉一、西谷隆亘、田村佐喜子、小原茂延

湘南平の一日

砂田　定夫(神奈川支部)

11 月 5 日（日）、緑爽会の「湘南平に岡野金次郎碑を訪ねる」に松本恒廣会員からご案内をいただき、参加させていただきました。当日は終日小春日和に恵まれ、想い出に残る山歩きとなりました。筆者と同じ神奈川支部に所属する川俣俊一会員がコースガイドを務められ、丘陵の東端にある東天照からのコースでしたが、何度かこの丘陵を訪れているものの初めてのアプローチであり、新鮮な印象でした。途中の浅間山にある１等三角点に関連して、わが国における三角測量の最初の基準となった「相模野基線」が近隣にあることを説明させていただきました。湘南平（千畳敷山）に建立されている岡野金次郎碑の前でスピーチするのは２度目になります。１回目は 2013 年 12 月、JAC 年次晩餐会の翌日に行われた記念懇親山行のときで、集会委員会（現山行委員会）の委員として参加したときでした。今回は特に金次郎の人となりが案外知られていないことに触れ、その功績を中心に話しましたが、皆さま熱心に聴いていただきました。

岡野金次郎は、盟友小島烏水との交友について「小島と私」という文を『山岳』44 年 1 号に発表していますが、三男満に口述筆記させています。このような例から文筆が不得手だったといわれ、文章を公表することはありませんでした。名士扱いにされていくのが嫌だったと述懐しており、山岳会を退会し、在野に生きた清貧の人だったことから、小島烏水などに比べてその功績などが今ひとつ知られない理由だと思います。岡野金次郎が登山史上に残した功績は、次の３つが考えられます。

①著書を見つけた偶然からW. ウェストンとの面会・交友にまでこぎつけた行動力が日本山岳会創立の導火線となったこと。
②烏水との槍ヶ岳登山などでは陰の牽引役を果たし、日本人による近代登山の先駆けを果たしたこと。
③近代登山が遅かった丹沢山地の先駆者だったこと。

その他、青年時代の冒険精神を示す例として、日本郵船の土佐丸に乗り込んで世界一周航海をしたり、本国ばかりでなく、統治下にあった満州、樺太、朝鮮の山を歩き回ったりしました。こよなく愛した富士山には82歳まで訪れ、112回も出かけています。高低、有名無名にかかわらず山を愛し、日々欠かさず散歩をした人で、生涯にわたって歩き続けた人でした。

-碑前で砂田さんのお話しに聞き入る-

この日、金次郎翁の夫人とよさんの縁故にあたる渡邊貞信会員の提供された話は興味あるもので、山行の途次も会話の中で翁のエピソードが話題となって有益な1日となりました。なお、後日、夏原寿一会員から丁重なお便りと集合写真を恵送いただき、感謝致します。

～～《寄稿/投稿》～～～

小島烏水と岡野金次郎が知り合ったきっかけは８年前、1894（明治 27）年の徴兵検査まで溯る。烏水は丙種、岡野は乙種で不合格だったが、浮世絵、芝居、文学など趣味を通じて意気投合し、江戸時代の面影を残す東海道や高尾山などの登山を経て 6 年が経ち、3 千メートルの高山に登ったのは 1900（明治 33）年の平湯峠を経て乗鞍岳に登った時が最初で、2 人が頂上に立った時に突然のように霧が晴れて遥かに急峻な岩峰が現れた。聞けば槍ケ岳だという。2 人が高山の素晴しさに触れた瞬間であった。このときに 2 人の槍ケ岳登山の計画が決まったのだ。

そして多くの山岳会の先達たちが思い起こすことになった山岳会設立の切掛けとなった幸運な出来事と、ウェストン、武田、高野、高頭と烏水の出会いという人の縁の不思議な後日談を語り継ぐことになる。第一の出来事は岡野金次郎が横浜海岸通りにあったスタンダード石油に勤めていたこと、そして支配人のハッパーが給仕にウェストン著の「日本アルプスの登山と探検」を返すように申し付けたこと、その本を岡野が見て、自分たちより前にウェストンら外国人が槍ケ岳に登っていること知り驚き、居留外人の住所録を調べてウェストンが山手教会の牧師館に住んでいることを知って訪ね歓談、その後にウェストンの要請もあって再び烏水と２人が訪ねて、アルパインクラブの設立を勧められたこと、第 2 の出来事は烏水がウェストンの著書の中の「甲斐の白根登攀」を訳して、大町桂月が主宰していた「太陽」に寄稿したこと、なかなか載らないので烏水が桂月に「原稿を返せ」と怒りの手紙を送り、桂月から「係りの手抜かりがあった。さっそく載せます」と返事があり、翌月掲載された。この記事を読んだ博物学同志会の武田久吉、高野鷹蔵の 2 人が山王の烏水宅を訪ね、山岳会設立の機運が高まったこと、また高頭式が志賀重昂を訪ね、雑誌「太陽」の白根登攀の記事を示され、烏水の存在を知って「日本山嶽志」の草稿（毛筆和紙で大八車 2 台分）を携えて山王の烏水宅を訪問したこと、２人の出会いから高頭は山岳会設立の発起人となって財政面を支えることになり、ようやく山岳会の設立が実現したこと、これらの出来事のすべてが岡野金次郎が回顧して語ったという「山の神の手引き」によるものであろう。

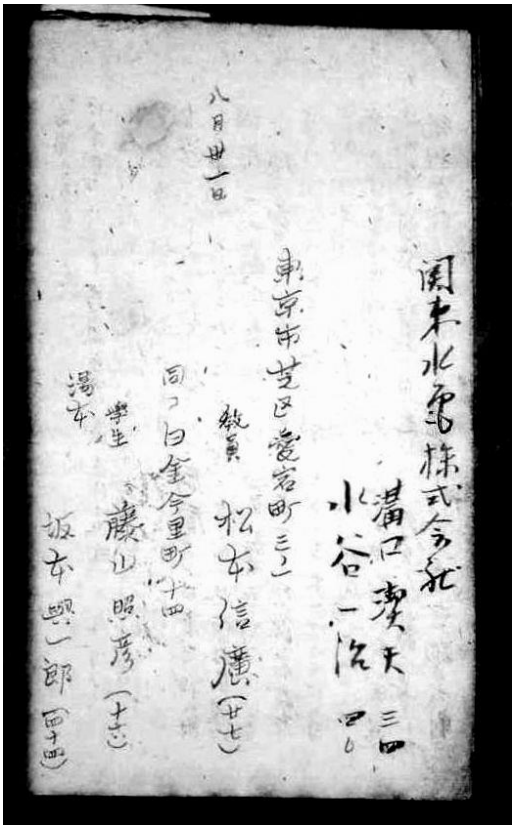
そして 2 人の槍ケ岳登山から７２年後の 1974 年、奇しくも山岳会設立 70 周年を前に当代の登山史研究家で図書委員長の山崎安治と小島烏水の伝記を執筆中の近藤信行の 2 人が小島烏水と岡野金次郎の登攀のあとを探る計画を立て実行する。山崎さんについて「ルートファイデイングの達人」（早大山岳部ＯＢの故錦織保清氏談）と聞いたことがある。それでも道のない霞沢岳東面の登攀は困難を極めた登攀となり、沢渡から霞沢を遡り、猛烈な藪漕ぎ、熊におびえながら２日目に頂上稜線にたどり着くが、水不足から八右衛門沢を下ることになった。白沢を経て明神へ出る計画は再度試みることになった。この経過は近藤信行氏が会報『山』第 353 号で報告している。

2 度目の霞沢岳東面の登攀計画は翌 1975 年 8 月に計画され、山崎、近藤のほか節田重節と友人の中出勲、高橋登美夫が参加することになり、先人と同じ 14 日に沢渡を出発、霞沢、霞沢岳稜線をたどり、小島、岡野が歩いたと想定された白沢源流を経て無事に明神に降り立った。明神から徳本峠への道は白沢の途中から左に折れて峠にたどり着くが、白沢をそのままたどると最後は急峻な崖となる。明治の昔と 1975 年の霞沢東面は同じではないが、道のない登攀の困難さは同じであろう。この 2 度目の登攀報告は会報『山』第 369 号、第 370 号に近藤氏によって報告されている。余談だが、この報告で現在、会報、山岳の編集をしている節田さんが佐渡の出身で木登りの名人というのも初めて知ったことである。

尾瀬長蔵小屋の宿帳に父を偲ぶ

松本 恒廣

緑爽会 10 月の講演会は穴田雪江さんの「武田久吉と歩いた尾瀬」。当会ならではの好企画で貴重なお話を聞くことができた。穴田さんとは山田二郎会長当時の理事会仲間。彼女は婦人懇談会担当で、私は自然保護担当だった。この穴田さんの講演に花を添えたのは平野紀子さん提供の貴重な記録映画『私と尾瀬』。このときの様子は前号の石塚さんの報告に詳しい。平野さんは当日、往時の尾瀬長蔵小屋の宿帳を持参された。大正 12(1923)年の日付がある。そこに何と私の父・信廣の名があった。同行者 3 名連名の紛れもない父の筆跡。90 余年前、当時父は 27 才、慶応義塾普通部（付属中学校）の教員で、同行の藤山照彦はのちの日本商工会議所会頭、岸内閣外相などを歴任した藤山愛一郎の弟。あとの 1 名の坂本氏は案内人ではなかろうか。父と愛一郎氏とは慶應の同期で大正 6（1917）年、槇有恒らによって結成された慶応義塾山岳会（後に山岳部となる）では共に幹事を務め、部報「登高行」１～２号の編集にも携わり、同時に初代の山岳部部長に就任した。因に、10 代目の部長・宮下啓三君（No. 5546）は小学校時代からの友人であり、父と同じ文学部で彼は独文の教壇に立っていた。緑爽会にも入会してくれて度々山にまつわる話をしてもらったが 4 年前、不治の病を得てあの世へ旅立ってしまった。愛一郎氏は既に日本山岳会に入会（No.395）しており、父は遅れて大正 8（1919）年（No. 680）会員になっている。この間、大正 5 年には茨木猪之吉（山岳画家）と、翌年には鹿子木員信（哲学者）と共に続けて劔岳に登頂している。劔岳測量で名を馳せた柴崎芳太郎が登頂してから 10 年後のことであった。当時、2 年後輩だった大島亮吉が残した紀行文「三頭山」、「狭山紀行」などに彼と行を共にした当時の父の面影を見ることができる。



−長蔵小屋の宿帳−

大正 12 年 8 月 31 日、尾瀬長蔵小屋に 1 泊した翌日、9 月 1 日の真昼時、父が長蔵爺さんと立ち話をしているとき尾瀬沼全体が大きく揺れた。これが関東大震災だったのだと時々、当時の話をしてくれた。翌年ソルボンヌ大学に留学したが後年、当地の日本人倶楽部にあった新聞で大島亮吉遭難の記事を見て愕然としたという。帰国後は山から遠ざかり、その後は我が家にあってもめったに山を話題にすることはなかった。私は、大学時代はワンダーフォーゲル部、卒業後は社会人山岳会で山歩きを続けていたが或る時、父は突然日本山岳会に入らないかと言い出し、私に入会申込書を書かせ、早速、三田幸夫・佐藤久一郎のサインを貰ってきてしまった。そして今の私がある（No. 7440）。父が亡くなって35年が経過した。会報「山」430号に山崎安治氏（早大 OB、常務理事、図書委員長などを歴任、登山史関連図書著作多数）の「松本信広氏の上高地スキー行」と題する追悼文が掲載されている。（追悼文は次頁に掲載）　＊山崎安治氏は、4 頁の中段下にも登場している。――編者注

今回、この記事を書くきっかけを作ってくれたのは平野紀子さん。感謝します。間もなく、私も父の亡くなった齢になる。

松本信広氏の上高地スキー行

慶大名誉教授松本信広氏が三月八日、八十三歳で死去されたことを新聞で知った。東洋史、民族学の権威であることは広く知られているが、氏は慶大山岳部の創期メンバーの一人であり、部報『登高行』第一年、第二年の編集、発行人であった。第一年には「狭山紀行」、「陸貝の研究に就いて」、「高麗山日和田山の伝説」、「山岳語に就いて」、「地形を表はす方言」、「信州島々地方の山岳語」、第二年には「風土記に現れたる山岳伝説」、「牛首岳と赤岩岳」、「南安曇郡の伝説」、第三年には「泰山の研究」などを発表され、後年のその道の片鱗をうかがわせる。

第二年の年報欄には大正八年三月二十三日から四月二日までの第三回関温泉スキー講習会のあと、第四回スキー講習会として

「第三回講習会後松本信広、斎藤茂、大島亮吉および小林達也の四人は上高地スキー旅行を行い成功す」と記されている。これは北アルプスにおける初期のスキー登山の記録からもまことに貴重なもので、くわしくその概要を知ろうと思い昭和五十三年十月、失礼をもかえり見ず手紙で問いあわせたところ十月四日付で次のような御返事をいただいた。

「お手紙拝見、残念ながら小生八月以降慶大信濃町の病院で臥床中であり、貴問に十分そうことが出来ません。『登高行』に出た記文にはまちがいがあり、御採用にならぬようお願いいたします。同行者は私の外に斎藤、大島両君だけです。大島君は当時スキーの初心者でしたが、がんばっておりました。上高地にはスキーのあとあり、私達より前に誰かはいっていることを知りました」

これにより講師小林達也氏は同行しておらず、三人だけで上高地にスキーを乗り入れたことが判明した。（小林氏は当時関山スキークラブの幹事で、スキーの名手として知られていたが、大正十年十月高田で腹膜炎のため死去した）

スキーで上高地入りをしたのは大正六年春横浜の外人ウインクラー氏が最初と思われる。大正七年三月には京都の田中喜左衛門氏一行があり、大正八年四月、松本氏が見たスキーの跡というのは、このシーズン常念越えで槍沢から槍ヶ岳をうかがい上高地へ下った学習院の板倉勝宜氏らのものであろう。

松本氏はこのときのことを『大島亮吉全集』第五巻「大島亮吉君と私」の中で簡単に触れ、登高行第二年をもとにした『登高者』（安川茂雄編）所載の年譜の誤りを指摘されている。それにしてもこのスキー行はもっとこまかく知りたかった、とくやまれる。松本氏のご冥福をお祈りする。（山崎安治）

-会報『山』430号に掲載の追悼文-

駒の小屋での出会い

荒井 正人

山で出会って親しい間柄となることは多くの人が経験していることだろうと思う。私の一つの体験である。

昨年の１０月はじめに越後駒ケ岳、駒の小屋を訪ねた。当会の吉田理一さんが年に数回、管理人として入っておられるので、山の上でお酒を飲みながら山のこと、山の本のことなどを語り合いたかったのだ。雨の平日で独占状態であった。午後２時過ぎから一杯、いや、うーんといっぱい飲ませていただいた。

翌朝は山頂往復後、紅葉を愛でつつ銀山平に下り、バスでやってきた相棒と伝之助小屋に泊まった。最近「裏越後三山」という言い方があるようで、そのコースを歩くのだ。次の日荒沢岳に登り、途中テントで一泊し、中の岳～駒ケ岳をぐるりと回って再び越後駒の山頂に立った。充実感たっぷり。山頂を辞して３日前に泊まった駒の小屋に下る。

小屋は結構混んでいて、遅めの到着だった私たちは酒宴中の男性１人、女性２人の３人組にスペースを少し空けてもらった。寝袋を出し、エアマットを敷いて、さて我々も乾杯という段になって、私は思い切ってその３人組に尋ねてみた。「どちらからですか？」実は整理をしている間じゆう３人組のイントネーションが気になっていたのだ。すると「遠野から。わかります？　遠野って」わかるもわからないも、私は２年間盛岡で暮らしている。岩手との見立てに間違いはなかった。となればもう、つまみを提供して宴に加わ

らせてもらうしかない。かくして、持っていたお酒は飲み尽くし、駒の小屋の楽しい晩は更けていった。

翌日、駒の湯に下る途中で３人組に追いつき一緒に下ると、温泉に入らずタクシーを呼んで、車の置いてある枝折峠に戻るという。男性の運転で今日のうちに遠野まで帰るそうだ。女性の１人が記念撮影しましょと言って男性がシャッターを押してくれた。私は名刺があったのを思い出し、お渡しした。５年前に自由人との肩書で作った途端、腰を痛めて不自由人になったイワクつきの名刺。その最新版で裏には属性や拙著のことも印刷してある。

１０月下旬に盛岡の昔の仲間たちと会うことになっていたから、住所が判れば訪ねるつもりでいたが音沙汰がなかった。あれ～、写真が届かないと年賀状も出せないなあと思いはじめたクリスマス直前、赤い封筒でカードと一緒に写真が送られてきた。やるなあ、こう来たかと感心して読むと、なんと拙著も読んでますよとある。嬉しいことだ。

こうして年賀状、メールのやり取りなどが始まった。この秋は妙高・火打に行ったそうだ。今度は温泉に入ったかどうか、まだ聞いてないが。私からは「来年の夏、遠野産ホップを使ったビールが出来たら行きます！」と返信してある。また山友達が増えた。

ピースの箱

夏原 寿一

今年の晩餐会で、資料映像委員会の特別展示「マナスル登頂」に出品されていた下の写真の展示物に気付かれただろうか？　これは 1956 年、マナスル登頂記念に発売されたタバコ「ピース」の箱を広げたもので、まだ 20 歳になっていなかった私が父に頼んで買ってきてもらった“記念品”だ。

2, 3 年前、マナスル登頂 60 周年の機運が高まってきたころ、「たしか我が家にピースの箱があった」と思い出して探したら出てきたので、早速、資料映像委員会に寄贈したものだ。

今回、晩餐会でこれが展示されているとは、私にとってのサプライズであった。
（この箱は、会報『山』No.829 の 19 頁「日本山岳会所蔵資料紹介　No.12」に掲載されている。）

～～《予告など》～～～

2月例会　　10日（金）　午後2時～　　集会室

演題：「マナスル60周年式典 in ネパール」（仮題）

お話：神崎忠男会員

・2016 年は、マナスル登頂 60 周年記念にあたり、現地ネパールにおいても盛大な祝賀行事が行われました。その祝賀会等に参加された神崎忠男会員に現地での様子を映像も交えて報告していただき、併せて過去にヒマラヤに挑んだ日本隊の活動なども語っていただきます。

同行した富澤克禮会員、川口章子会員にも話に加わって頂く予定です。

3月山行　　12日（日）「観梅山行」＝群馬・榛名梅林　　担当：富澤克禮、夏原寿一

詳細は次号でお知らせします。

新入会員　小清水敏昌（会員番号　11851）　東京多摩支部所属

＊お知らせ

次号から、会報編集は荒井正人さんの担当になります。

会報の編集は、昨年の4月から夏原が担当してきましたが、「ひとりだけが編集に慣れているというのはよくなかろう」ということで、「誰か他にも」という話が以前から出ていました。そこでこの度、荒井さんにバトンタッチすることになりました。しばらくは、夏原が手書き原稿の入力や掲載写真の加工、HP への掲載などをサポートしながら進めていきます。

荒井さんは白山書房から『山もよう人もよう』（図書室所蔵）と題した味わいある内容の本を出版しているほどの力の持ち主、“荒井色”の会報が楽しみです。

--- **編集後記** ----------

・11月山行「岡野金次郎碑…」は、「100年史でご一緒した川俣さんと飲んでいるときに出た話」ということで、松本さんからの提案。低山ながら歩きではあったし、川俣さんと、同じく神奈川支部の砂田さんの案内とお話しと相俟って充実した山行だった。◆大磯駅まで見送りに来てくださった関塚さんとお喋りしながら、その昔、夜行列車で山に行く友人を見送りに、会社帰りに新宿駅に行ったことを思い出した。◆渡邊貞信さんとの出会いは2014年の秋、山研で。そのとき、「私は岡野金次郎の孫」との話が出てビックリ！　そんなことがあって今回、ご参加いただいた。

・前号に掲載した石塚さん執筆の10月講演会記録「武田久吉と…」について、渡部さん、南川さん、そして話をして下さった平野さんからも、「上手に纏めてある、とてもよい読み物になっている」等のお褒めの電話やお便りを頂いた。

・新入会の小清水さんは、10月の「武田久吉と…」に出席されている。緑爽会に近い存在だったと思っている。

・その小清水さんが世話役をされた支部主催の写真講座に参加した編集子は…、東京多摩支部に入会！　　（夏原）

カット：中村好至恵　写真：夏原寿一

＊良いお年をお迎えください＊

事務局=富澤克禮、夏原寿一、瀬戸英隆、荒井正人